

第2学年

学年通信

練馬区立上石神井中学校

令和2年5月13日(水)
No.4 発行者:石坂 恵理

全国のみならず、全世界で、医療従事者をはじめとして、命懸けで奮闘されている方々の活動が、連日のようにニュースや新聞、インターネットの記事等で報道されています。

学校も臨時休業が続き、大変辛い状況ですが、今の社会で起こっていることにしっかりと目を向け、考えることも大切です。

いくつか記事を紹介しします。ぜひ読んでみてください。

東京都西部を管轄する、ある保健所。深夜11時頃、1日の仕事を終えた保健師の40代の女性はため息をつきながらはたと気付いた。「ああ、何か気持ち悪いと思ったら、昼も夜も食べてなかった……。」

この保健所で、感染症対策を担う職員は補充要員を含めて9人。朝から深夜までの勤務は週末も続く。

仕事が終わっても、家族との時間は十分にとれない。9歳の娘の通う小学校は休校中で、日中の世話は夫や近くに住む親戚にお願いする。感染症のプロとして、適切な感染対策をしながら仕事をしているが、娘は「ママが感染したらどうしよう」と不安がる。娘の涙ぐむ姿に後ろ髪をひかれながら、今日も職場へ足を踏み出す。
(日本経済新聞 2020/4/15)

北海道医療センターでは2月から感染者の受け入れが始まりました。結核診療の歴史がある当センターでは、経験を積んでいるスタッフが対応に当たることによって大きな混乱もなく感染者の受け入れに移行できました。しかし、未知のことも多く、スタッフはみな、不安を抱えながら働いています。ガウンやマスクをはじめとした医療用具の不足もそうですが、医療従事者の数はもっと不足しており、感染者がさらに増えた場合の診療体制の再編成も深刻な問題です。このままいくと、入院診療だけの対応では、難しくなるでしょう。あらゆることの先行きが不透明で、診療スタッフも精神的にまいっており、薄氷を踏むような毎日です。治療はまだ確立したものがなく対処療法が主体となりますが、ワクチンの開発に期待しています。それまで何とか現場でもちこたえたいと考えています。

(朝日新聞出版アエラ月4号の記事より)

新型コロナウイルスの感染者が増加する中、多くの客と接するスーパーの店員や配達ドライバーらは感染リスクに注意しながら職務に当たっている。こうした社会の維持に不可欠な仕事に就く人は、「エッセンシャル・ワーカー(必要不可欠な労働者の意味)」と呼ばれるが、客からの心ない言動にさらされることも少なくない。社会の重要な担い手への理解や配慮を求める声が強まる。

「物流が止まると、社会が止まる。それはあってはならない」。約10万のトラック運転手らが加盟する運輸労連(東京)の委員長は、運転手らの思いをこう代弁した。

三月には「荷物の届け先で消毒スプレーを掛けられた」との相談が寄せられた。各運送会社は運転手の手のこまめなアルコール消毒に加え、対面を減らすため荷物を玄関先に置くなど、対策を徹底。過剰な反応は聞かれなくなったという。

「人間扱いされず悲しい」「品切れのクレームで精神的に疲れた」……全国スーパーマーケット協会(東京)には、現場の店員からさまざまな相談が寄せられた。家族連れを指して、「密になる。なぜ家族で来ているんだ」と店員に迫る客もいるという。同協会の担当者は、「ストレスで利用客のいら立ちが募っている。」と受け止めるが、「生活を支えようと頑張っている店の事情も分かってほしい」と話す。

医師が院内感染し外来診療をやめた病院。バスの運転手による路線バスの運休。郵便局員の感染で配達や窓口の一時停止……エッセンシャル・ワーカーが罹患し、日常生活に大きな影響が出た事案も各地で報告されている。

こうした中、医療関係者ら、感染リスクと向き合いながら最前線で働く人たちに、青色の光で感謝の思いを示す運動が広がりを見せ、東京都庁などが夜間にライトアップされた。

コロナが長期化する中、社会生活の維持にはエッセンシャル・ワーカーの力が不可欠だ。彼らが置かれている過酷な状態への一層の理解と配慮が必要だと呼びかけている。

